

人とのかかわりの中で育まれる「居場所」

～総合的な学習の時間への取組を通して～

長野市立通明小学校 熊谷航

きっかけ～A児との出会い～

子ども主体でどんどんと活動が展開されていくことに魅了され、これまで様々な総合的な学習の時間の取組を行ってきた。本校に赴任し、どんな活動に取り組んで行こうか胸を躍らせていたときに出会ったのが、ロッカーの上に座っていたA児であった。髪は金髪。目が合っただけで襲いかかる。自分からぶつかっていったら取っ組み合いの喧嘩。口を開けば「死ね」「殺すぞ」。中指を立てて喜んでいる。しかし、そんなA児とかかわっていく中で、家庭的にも複雑な事情を抱え、自己肯定感が極めて低いことが分かってきた。このA児が学級の輪の中から外れないようにするにはどうしたらいいのか？それを絶えず考える日々が始まった。

また、自然環境に恵まれていた今までの学校とは違う市街地の本校でどんな活動ができるのか、「材」を見つけることも自分自身の課題であった。



実践の記録



響け！僕らの通明太鼓！（4年生）

エイサーとの出会いから、太鼓の活動に取り組んだ。マイバチを作り、初めて打つ瞬間。仲間と練習を繰り返し、音が揃った瞬間。師匠の音に「ぞわっ」となった瞬間。様々な瞬間を経て、子どもたちは太鼓の音色に魅了されていった。

篠ノ井商店街とわたしたち（5年生）

散歩に出かけて何気なく通った商店街。もの寂しい雰囲気から、自分たちにできることはないか考え、活動がスタート。ごみ拾いをしたり、何度もお店に通ったり、地域の方々とかわるなかでその温かさに触れ、自分たちのふるさとのよさを再確認していった。また、その活動は新たな出会いをもたらした。

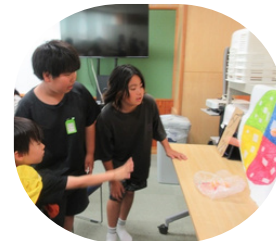
保育園児とのかかわり（6年生）

5年時に地域の方々とかわり、その温かさに触れた子どもたちは「ひと」に興味をもっていた。近くにある保育園の園児との「夏祭り」や「ミニ運動会」などのかかわりの中で、園児の様子や言葉から自分の在り方を見つめなおしていた。



A児の変容

- 最前列で材木のカットを待っていたり、バチが割れてしまっても作り直したり、できないとすぐにあきらめてしまうA児があきらめずに物事に取り組んでいた。
- 突然の訪問にも関わらず、温かく迎えてくれた歴史のある酒屋さん。A児のその日の日記には「やさしくしてくれてうれしかったです。」と他者の行為をしっかりと受け止めることができていた。このことからA児にとってA児が知らない人とかかわることの大切さや意味を感じた。
- 園児とのかかわりの中で、A児が暴言を吐いたり、暴力を振るったりすることは絶対になかった。普段の生活からは想像ができないその姿に、クラスの仲間もA児本人のことを捉えなおしているように見えた。



A児とのかかわりの中で



A児と過ごす中で、いくら暴言を吐かれようとも、とにかく話を聞き、一方的に決めつけることはせず、まずはA児の訴えを受け止めることを大切にしたい。その繰り返しによって「死ね」という言葉の裏側にある思いが少しずつ見えるようになってきた。総合的な学習の時間の中でも、A児の前向きな姿をクラスの仲間にも広げることができた。そんなA児の取組の様子を周りもみて、A児を捉えなおし、A児の「居場所」ができていった。どの活動も子どもの願いや意識から立ち上がっていった。大自然に囲まれていなくとも、学校の外に出てみたり、子どもの意識がどこにあるのか注意深く探ってみたりすることで、身もまわりにある「材」に気づき活動となっていた。